鹿屋市立田崎中学校
田崎中だより
校訓「向学・協力・自律・奉仕」
第３号　令和５年５月25日　　発行・文責：校長　竹崎　賢一

いたるところであじさいが咲き誇っています。彩りの違いが何によってもたらされるのか知りませんが，自然の妙に驚かされます。６月は地区総体，期末テストと大きな活動が控えています。まずは体調管理に努めて，万全の態勢で臨めるようにしてほしいものです。新型コロナウイルスの感染拡大は収まりつつあるように思われますが，その代わりに息を吹き返してきたのがインフルエンザです。気を緩めるわけにはいきません。自分ひとりの問題では済まないのが怖いところです。「周りに迷惑をかけない」社会人として過ごしていくための大前提です。その時々の是々非々の判断がしっかりとつく人間に成長しているかどうか，その度合いを測ることができるのが６月です。保護者のみなさまには，我が子の６月の過ごし方をぜひ注目していただきたいものです。人のために行動できるようになってきた，周りに配慮できるようになってきた，期待しましょう。

【読書について】

「第４次鹿屋市子ども読書活動推進計画」という計画があるのをみなさんご存じでしょうか。子どもの読書活動が一層推進されるよう，令和４年４月に策定されたものです。その中に，「児童・生徒の平均読書冊数」というものが示されていますが，鹿屋市の令和 3 年度の中学生の１カ月当たりの平均読書冊数は何冊くらいだと思いますか。

答えは 6.0 冊です。ちなみに鹿児島県全体だと 6.5 冊，全国平均だと 4.7 冊となっています。平成 27 年度の鹿屋市の数値は 5.1 冊でしたから，中学生の読書冊数は増加しているとみることができます。ちなみに，わたくしの前任地南さつま市の令和 3 年度の中学生平均読書冊数が 3.2 冊でしたので，鹿屋市の中学生は本を読むなあと感心しています。もちろん県平均は下回っているので手放しで喜べるわけではありませんが…。

問題なのは本校の読書の状況です。本校の図書館司書に聞いたところ，令和４年度の本校の平均読書冊数は，なんと 12.4 冊でした。このデータにはわたくしも正直驚きました。鹿屋市の倍読んでいる。読書離れ，活字離れが叫ばれて久しくなりますが，本校の読書環境は充実している，学力向上の基盤はできあがっている，そう確信させてくれました。

ただ，それでもわたくしたち教員や保護者のみなさまは，子どもにもっともっと読書をさせたい，読解力をつけさせたい，表現力をつけさせたい，ゲームや SNS に向ける時間を読書に向けさせたい，そう語ります。

ベネッセ教育総合研究所から公表されている，読書と学力の相関データによると，①読書量と偏差値の伸びには相関関係がある。②読書で成績が上がるのは全ての教科だが，中でも伸びが大きいのが数学。③成績の上下にかかわらず，読書量が多い方が偏差値が伸びる④多様なジャンルを読めば読むほど偏差値の伸びも大きい。とあります。相関関係ですから，読書をすれば必ず学力が上がると保証されるわけではありませんが，そうだとしても，かなり気になるデータではあります。

先の「第４次鹿屋市子ども読書活動推進計画」には鹿屋市の子どもたちの気になるデータも掲載されています。それは「不読率」と呼ばれるもので，家庭で読書をしない生徒の割合が 32.3%，家庭・学校・地域で読書をしない生徒の割合が 8.5%となっています。これは，家庭で読書をしない子どもが 3 人に１人，家庭でも学校図書館でも市立図書館等でも読書しない子どもが 10 人に１人の割合でいるということです。本校の不読率のデータがないため直接の比較はできませんが，本校にも一定数の不読率はあるものと思います。平均読書冊数は高いけど，不読率もある程度いる，ざっくりと読む生徒と読まない生徒の２極化という現状があるのだろうと思います。平均読書冊数が多いからといって安心してはいられない。子どもの読書状況については引き続き注意を払っていかなければならない，そう思います。

ここで，子どもの読書環境ということについて，わたくし自身の話をしてみたいと思います。わたくしは，国語科の教員ということで，我が子の読書環境にはかなりこだわり，それこそ理想的な読書環境を構築しようと，長女・長男の誕生に合わせて，それこそ絵本全集に始まり，童話全集，日本文学全集，古典文学全集，世界文学全集，随筆全集（決して盛っているわけでなく，全て本当に購入しました。家内はかなり反対しましたが…）などを購入したのですが，我が子たちは，わたしが揃えたものにはついに見向きもせず，それら膨大な図書資料は，十数年後に新品同様のまま，むなしくブックオフへ嘘みたいな安い値段で売却されました。本が溢れていれば，子どもは自然と読書するようになるんだろうという勝手な思い込みが全否定された失敗例です。

ただ，我が子たちは，読書習慣がつかなかったかというと，決してそうではなく，二人とも成人した今でも読書を趣味として，いろいろな本を読んでいます。そんな姿を見ると，子どもにとって望ましい読書環境とはいったい何だろうとわからなくなります。

思い当たる点があるとすれば，自分が読んでおもしろいと思った本は，子どもたちにも伝えていました。子どもたちは，その中から自分の好みに合う本は手に取り，そうでないものはあっさり無視していく中で，少しずつ自分なりの読書の世界を作り上げていったのでしょう。

もし，保護者のみなさま，我が子にもっと読書をさせたいとお望み，あるいは我が子が全く読書をしてくれないとお嘆きでしたら，まずは自分から始めてみる。時間がない，何を読めばいいか分からない，それは子どもたちの言い分と何ら変わらない。むしろ，子どもたちの言い分が，自分自身の感情として理解できるだけ，どうすれば読書に向かうようになるのかという問題も，切実な自分の問題として理解できるのではないでしょうか。

どうすれば自分は読書するようになるのか，その答えはおのずと我が子が読書に向かうようになる答えだろうと思います。自分が読んだ本の面白さを，自分以外の誰かに伝えるというのは，実はとても楽しい活動です。それが我が子や家族相手ならなおさらです。最近ではブックトークやビブリオバトルといった，本の面白さを伝える読書活動が学校や地域の図書館等で行われています。はやりのことばで言うのなら「推し」ということになるのでしょうか。ぜひご家庭でも気軽にチャレンジしてみてください。